幸福を考える(1)

倫理学

江口聡

復習

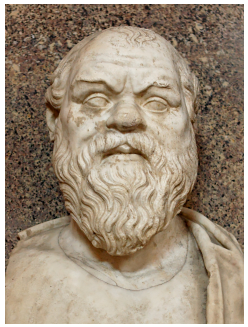
- 道徳は感情に関係ありそう
- 我々は幸福を求めている（でも時々他の人々のことを考えている）
- 道徳的であることは自分を特別扱いしないこと
- → 道徳的には、皆の幸福を増進することが正しい
- とりあえず幸福は大事。しかし幸福がなんであるかわかってる？

幸福は皆が求める

- 誰もが「よく生きること」という意味での幸福を求める
- しかし、幸福とはなにか？
- 幸福は快楽の生活か？
  - 快楽 ＝ pleasure 喜び
  - 「楽しく」生きることが幸福な人生か？

ソフィスト対ソクラテス

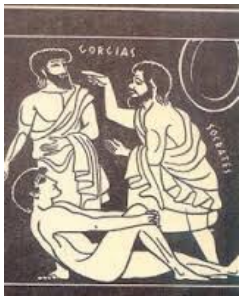
- プラトン『ゴルギアス』での論争。
- 「幸福」＝「よく生きること」
- エウダイモニア ＝ 守護神（ダイモン）によく守られている
- ソフィストのカリクレス「よく生きるとは欲望を満足させ、快楽をむさぼることである」
- ソクラテス「よく生きるとは正しく生きることである。正義、思慮、勇気、節制などの徳を身につけそれを発揮した秩序ある生活をすること」



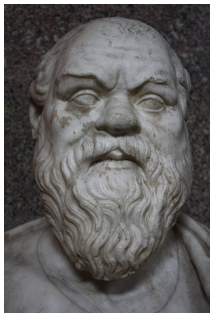
『ゴルギアス』から

- しかしながら、けだしこのようなことは、とても世の大衆のなしうるところではない。そこで、彼ら大衆は、それにひけ目を感じるがゆえに、こうした能力のある人たちに非難の矢を向けるのであるが、これも、つまりは、おのれの無能力をおおい隠そうという魂胆にほかならぬ。そして口を開けば、放埒は醜いことだと主張して、さきの話のなかでわたしが言った生まれつきすぐれた素質をもつ人たちを抑えつけ奴隷化しようとするわけだ。そしてまた、自分たちは快楽に満足を与えることができないものだから、しきりと「節制」や「正義」を誉めたたえるけれども、それは要するに、自分たち自身に意気地がないからなのだ。

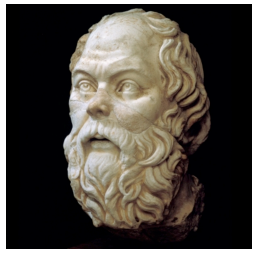
いや、ソクラテス、あなたは真実を追求していると称しているが、よろしい、それなら、そのありのままの真実とはこうなのだ。すなわち、傲りと、放埒と、自由とが、ひとたびそれを裏づける力を獲得するとき、それこそが人間の徳というものであって、それ以外の、あのお上品ぶったいろいろの飾り、自然に反した人間のあいだの約束ごとなどは、馬鹿げたたわごとにすぎず、なんの価値もないものだ。



[ソクラテス]まことに堂々と、カリクレス、君は議論を徹底させ、率直に披瀝してくれる。じっさい、ほかの人たちなら、心には思っていても口に出してはなかなか言いたがらないようなことを、君はいま、あからさまにぶちまけてくれているのだから。しからば、ぼくからも君にお願いしておこう。いかなることがあっても、その追求の手をゆるめないようにしてくれと。人はいかに生くべきかということがほんとうに明らかになるためにね。では、どうか言ってくれたまえ。



君の主張によれば、人間本来のあり方にかなったような者になろうとするならば、もろもろの欲望を抑制すべきではなく、できるだけ大きくなるままにゆるしてやって、なんとしてもそれに満足を与える途を考えてやらなければならぬ、そしてまさにそれが人間の徳性にほかならぬと、こう言うのだね？



[カリクレス]いかにも、それがわたしの主張するところだ。

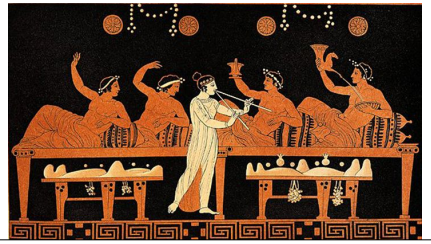
[ソクラテス]そうすると、何ものも必要としないような人たちが幸福なのだと言われているのは、あれは間違っているわけだね

[カリクレス]もしそうだとしたら、石や死人たちがいちばん幸福だということになるだろうからね。

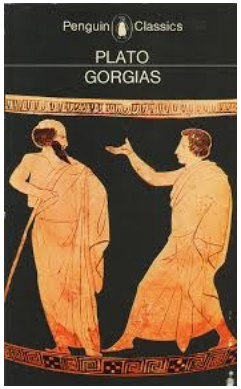
[ソクラテス]・・・問題の二つの生き方、秩序ある生活と放埒な生き方のそれぞれについて、つぎのように言うことを君は認めるかどうか、まあ考えてみてくれたまえ。いまここにＡとＢの二人の人間がいて、二人ともそれぞれ、たくさんの甕を持っているとしよう。Ａの人が持っている甕はいずれも傷のない健全なもので、その一つには酒、一つには蜜、一つには乳というようにして、そのほかにたくさんの甕がいろいろのもので満たされている。ただ、こういったいろいろの液体の、一つ一つの補給源はめったにないうえに、近よりがたく、それを手に入れるためにはさんざん困難な苦労をしなければならないものとしよう。

さて、Ａの人は、いちど甕を満たしてしまえば、あとはもう、注ぎ入れることもしなければ、それに気をつかうということもなく、こうした点に関しては平静な落ち着きを保っている。これに対してＢの人のばあい、補給源に関しては、いちおう補給可能ながら困難な仕事であるというＡの人と同じ条件にあるけれども、ただ、それを入れる容器のほうが穴のあいた傷ものばかりであって、ために彼は、夜となく昼となく、たえずそれを満たす仕事をつづけていなければならない。そうしないと、極度の苦痛を味わうことになるのだ。

はたして君は、それぞれの生活がこのようなものであるとしたら、放埒な人の生活のほうが秩序ある人の生活よりも幸福だと言うだろうか。どうだね、こんなふうに言えば、いくらか君を説得して、秩序ある生活のほうが放埒な生活よりも善いということを承認させることになるだろうか。それとも、まだ説得するにはいたらないだろうか。



[カリクレス]その説得は功を奏さないね、ソクラテス。なぜといって、自分の甕が満たされた第一の男にとっては、もはや、なんの快楽もありえないわけだからね。それこそまさに、さっきわたしの言ったような、石に似た生き方というものだ。なにしろ、いったん満たされてしまったのちは、もはや喜びも苦しみもなしに生きるのだから。いや、快く生きるということは、できるだけたくさん「流れこむ」という、まさにそのことのなかにあるのだ。



[ソクラテス]たくさん流れこむとすれば、当然の理として、出ていくほうもまた、たくさんでなければならないし、流れでるための穴も、やはり、なにか大きなものでなければならないわけだね？

[カリクレス]たしかにその通りだ。

[ソクラテス]こんどは、なんだか、君の言う生き方は、貪欲な鳥の生活を思わせるね。なるほど、死人や石のように生きるのとは、たいした違いだ。ではひとつ、言ってみてくれたまえ。そのような生き方について君が念頭においているのは、たとえば、腹がへることや、また空腹のときにものを食べることなどだろうね？

[カリクレス]いかにも。

[ソクラテス]それから、喉が渇くことや、渇いているときに飲むことなども、そうだね？

[カリクレス]そうだ。また、そのほかのおよそありとあらゆる欲望をもち、それらをのこらず満たすことができて、それによって喜びを感じながら幸福に生きるということを言っているのだ。

[ソクラテス]よくぞ言ってくれた、すばらしい友よ。どうか、そういうふうに、最初にはじめたときの調子を最後までつづけてくれたまえ。恥ずかしいと思ったりするのは禁物だ。しかしどうやら、そう言うぼくのほうも、恥ずかしいのを我慢しなければならなくなったようだ。まず手はじめに聞くが、人が疥癬にかかって、かゆくてたまらず、思うぞんぶんいくらでも掻くことができるので、掻きつづけながら一生をすごすとしたら、これもまた幸福に生きることだと言えるのかね？

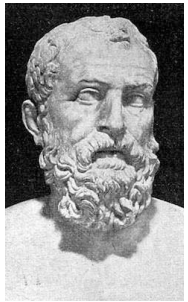
- ソクラテスは正しく生きることが幸福な生活なのだと主張するが、カリクレスは納得せず、ケンカ分かれに終る。
  - 「そんなふうにずっと哲学しているなんて子供っぽいことだ。ちゃんとした大人の男は政治をするのだ！」
- プラトン『国家』も同じテーマを扱う。

アリスティッポス

- キュレネのアリスティッポス (ca. 435-356 B.C.)。キュレネ派の祖。
- そのときそのときの快楽を大事に生きるべし。
- 「彼は現にあるものの快楽を享受し、現にないものの愉しみを追い求めることはしなかった」

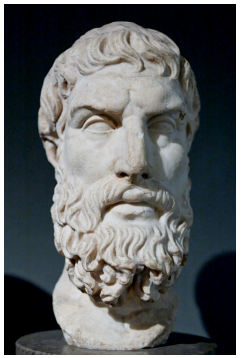
- 「あるとき、贅沢に暮しているのを非難されると、「もしそれがよくないことだとしたら、神々のお祭においても贅沢することはないはずだがね」と彼は応じた。」(DL, 174)
- 「ある日、娼家に入ったとき、同行した若者の一人が顔を赤らめていると、「危険なのは、入ることではなくて、出てくることができないことだ」と彼は言った。」

- 「個々の快楽はそれ自身のゆえに望ましいものである」
- 「快楽が目的であることの証拠としては、われわれは子供の頃から本能的にそれに親しんできており、そしていったんこれを手に入れると、もはやそれ以上に何ものをも追い求めはしないし、またそれと反対のものである苦痛ほど避けるものは何もないという事実をあげた。」
- (ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』)



エピクロス派

- エピクロス(341-270B.C.)
- 幸福とは快楽であり、苦痛がないことである
- ただし、積極的に快楽を求める活動は苦労が多いので、主として苦痛を減らすことを目指した方がベター
- 「隠れて生きよ」



- いずれの快も、それ自身としては悪いものではない。だが、或る種の快をひき起こすものは、かえって、その快の何倍もの煩いをわれわれにもたらす。
- 自然のもらす富は限られており、また容易に獲得することができる。しかし、むなしい憶見の追い求める富は、限りなく拡がる。
- 欲望のうち、或るものは自然的でかつ必須であり、或るものは自然的だが必須ではなく、他のものは自然的でも必須でもなく、むなしい憶見によって生まれたものである。
- より大きな快を楽しむために、これらのさまざまな苦しみに耐えることは、よりよいことである。また、もっときびしい苦しみに悩まないために、これらのさまざまな快をさしひかえることは、有益である。

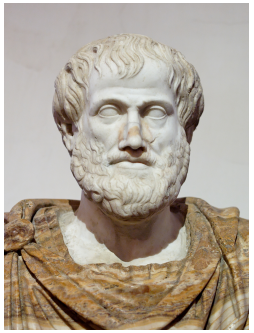
- 水とパンで暮しておれば、わたしは身体上の快に満ち満ちていられる。そしてわたしは、ぜいたくによる快を、快それ自体のゆえにではないが、それに随伴していやなことが起るがゆえに、唾棄する。
- 飢えないこと、渇かないこと、寒くないこと、これが肉体の要求である。これらを所有したいと望んで所有するに至れば、その人は、幸福にかけては、ゼウスとさえ競いうるであろう。
- いっさいの善の始めであり根であるのは、胃袋の快である。知的な善も趣味的な善も、これに帰せられる。
- チーズを小壺に入れて送ってくれたまえ、したいと思えば豪遊することもできようから。

- 見たり交際したり同棲したりすることを遠ざければ、恋の情熱は解消される。

- 肉体の衝動がますます募って性愛の交わりを求めている、と君は語る。ところで、もし君が、法律を破りもせず、良風を乱しもせず、隣人のだれかを悩ましもせず、また、君の肉体を損ねもせず、生活に必要なものを浪費しもしないのならば、欲するがままに、君自身の選択に身を委ねるがよい。だが君は、結局、これらの障害のうちすくなくともどれかひとつに行き当たらないわけにはゆかない。というのは、いまだかつて性愛が誰かの利益になったためしはないからであって、もしそれがだれかの害にならなかったならば、その人は、ただそれだけで満足しなければならない。

アリストテレス

- 三つの幸福の形（人のタイプによる）
- (1) 快楽
  - ← 一般の人々が目指すもの
- (2) 立派な活動、名誉、成功、達成
  - ← 洗練された人々が目指すもの
- (3) 観想的生活（理論的探求）＝学問、瞑想
  - ← 最高度に優れた人々が目指すもの



- 「人間にとっての善(幸福)とは徳(卓越性)に基づく魂の活動である、ということになるだろう。その活動にはしかし、人生全体において、という条件がさらにつけ加えられねばならない。一羽のつばめが春の到来を告げるものでもなければ、一日で春になるのでもないからである。同じようにして、一日や短い時間で、人は至福にも幸福にもなりはしないのである。」(『ニコマコス倫理学』)

- 人間にとってよい生とは、人間的な美徳・長所を発揮するような活動の生。全体として自分の長所を発揮することができた人生が幸福な人生

- 幸運、富、人間関係、快楽や休息なども重要。それらは人間らしい活動をするために必須

- われわれはこう言った、幸福とは「状態ではない、と。なぜなら、もしそれが状態であるなら、いわば植物の生を生きながら、生涯を通じて眠っているような人にも、あるいはまた最大の不運に陥っている人にも、幸福はそなわっていることになってしまうからである。

- そこでもしこのような見解が納得のゆくものではなくて、以前に述べたように、われわれはむしろ幸福をある種の「活動」と解すべきだとすれば、そして、さまざまな活動のうち、ある活動は必要なもの、つまり他のもののゆえに選ばれるものであるのに対して、他の活動はそれ自体で選ばれるものだとすれば、その場合明らかに、幸福とは、他のもののゆえに選ばれる活動の一つではなく、自足的なものだからである。

- また、それ自体で選ばれる活動とは、その活動から、当の活動をこえて、さらに求められるものが何もないような活動にほかならない。そして、徳に基づく行為こそ、このようなものと考えられるのである。事実、美しく、立派なことを行なうことは、それ自体のゆえに選ばれるものに属する。

- しかし、遊びのなかで楽しいものもまた、一般に、こうしたものだと思われている。というのも、人々は楽しい遊びを、他のもののゆえに選びはしないからである。実際、人々は身体や財産をかえりみずに、楽しい遊びから利益を得るどころか、損害をこうむることまでするのである。そして、世間で幸福だと見なされている人々の多くが、遊びで時を過ごすことに逃げ込むのである。

- それゆえ僭主たちのところでは、この種の娯楽において機知に富む者たちが名声を博するのである。それというのも、そのような者たちは僭主の目指していることの方面で、自分自身を愉快な人間として提供するが、僭主が必要としているのはそうした人間だからである。

- こうして、この種の遊びは、権力の地位にある者たちが余暇を過ごすようなものであることから、一般に幸福に満ちたものと思われているが、しかし権力の地位にある人たちというのは、おそらく、何の証拠にもならないだろう。なぜなら、もろもろの立派な活動が生まれてくるところの徳や知性は、権力を握ることにはかかっていないからである。

- だから、しばしば述べたように、貴重で快いものというのは、立派な人にとってそうであるようなものなのである。そして、それぞれの人にとっては、固有の状態に基づく活動が最も望ましく、したがって、立派な人にとっては徳に基づく活動が最も望ましいのである。

- それゆえ、幸福は遊びのうちには見出されない。事実、遊びが目的であるというのもおかしな話であり、われわれが全生涯にわたって努力して苦しむのも、遊ぶことのためだというのであれば、奇妙なことである。なぜなら、われわれはあらゆることを、何か他のことのために選んでいると言えるからである。

- ただし、幸福は別である。幸福は「究極目的（テロス）」だからである。また遊びのためにまじめに仕事をし、苦労するというのは、愚かで、はなはだ子どもじみたことだと思われる。逆に、アナカルシスが言っているように、「まじめに仕事をするために、遊ぶ」という見解の方が正しいと思われる。つまり遊びはいわば骨休めであって、われわれは連続的に労力を固むけることができず、どうしても骨休めを必要とするのである。したがって、骨休めは目的ではないのである。活動のためにこそ、骨休めがなされれるからである。

- しかるに、幸福な生活は、徳に基づいていると考えられる。そして徳に基づく生活は、真剣さを伴うものであって、遊びのうちにはないのである。さらにわれわれは、真剣な事柄とは、遊びと結びついたふざけたことよりも善きものであり、より善きものの活動は——それがわれわれのよりすぐれた部分の活動であれ、あるいはよりすぐれた人間の活動であれ——、つねに、いっそう真剣なものであると主張する。だが、より善きものの活動はそのこと自体すでに、よりすぐれており、より幸福に満ちたものなのである。

ヴォルテールの問い

- ヴォルテール(1694-1778)
- フランス啓蒙主義の中心人物。知性を重視。『百科全書』
- しかし、知性を鍛えると不幸になる？

- 旅行中、私は歳老いたバラモン僧に出会った。彼は賢明であり、特別な知性と教養をそなえていた。さらには、彼は裕福であり、そこおかげで、ますます賢明であった。なにも欠けるところがないので、彼は誰も欺く必要がなかったからである。彼の家庭は三人の美女によって営まれていて、この女性達は彼を喜ばすことに心をくだいていた。彼が女性達と楽しんでいない間は、哲学して時間をすごしていた。彼の家は美しく飾られ、素敵な庭があった。近所に歳老いた心の狭いインド人女性が住んでいた。彼女は愚鈍でかなり貧しかった。

- ある日、バラモン僧は私に言った。「私はうまれてこないほうが良かった」と。わたしがそれはなぜかとたずねると、彼は答えた。「ワシは40年も学んでいるが、この40年はまったくの無駄だったのじゃ。ワシは他人を教えてきたが、ワシ自身はまったく何も知らんままじゃ。こういうことを考えると、ワシの心は恥ずかしさと嫌悪でいっぱいになり、人生が堪え難く感じられるのじゃ。ワシは時間の中でうまれ、時間の中で生きているが、ワシは時間がなんであるかを知らん。……ワシはワシがなぜ存在しているのかわからん。しかし毎日人々はワシにこういう問題をたずねるのじゃ。ワシは答えなければならん。そして、ワシはなにも言う価値のあることを持っていないのじゃから、ワシはたくさんしゃべって、その後でしゃべったことを恥ずかしく思うんじゃ。」

- 「ブラフマンはヴィシュヌからうまれたのかとか、彼らは永遠なものとしてうまれたのかとかたずねられるときはまずますひどい。神こそ、ワシがほんのちょっとの観念も持っていない証人じゃ。ワシの無知はワシの答え方にちゃんと表われておる。「おお、聖なる方よ、なぜ悪が世界を覆っているのかおしえてください」と人はワシに尋ねる。こういう質問をする連中は扱いにくい。ワシはそういう連中に、物事はできる限り最善なのだと教えたりするのだが、戦争で滅ぼされた人々はその言葉を信じようとはしない。――もちろんワシもじゃ。

- ワシは打ちひしがれて家に引きこもった。ワシは古い本を読んだが、ワシの暗闇は深くなるばかりだった。ワシは同輩に話してみた。ある同輩は我々は人生を楽しみ、人類全体を馬鹿にしなければならんと言った。また別の同輩は、自分は多くのことを知ってしまい、思想の迷路の中で迷ってしまったと言った。こういうのはどれもわたしの苦悩を増やすばかりだ。ワシは自分がどこから来たのか、どこへ行くのか、自分は何であり何になるのかを知らんと思うと絶望してしまうのじゃ。」

私はこの良き人を本当に心配した。誰も彼以上に理性的で誠実な人はいないだろう。私は、彼の不幸は彼の理解力が発展し、洞察が優れたものになるに比例して増えているのがわかった。

同じ日に、私は彼の近所の老女に会った。私は彼女に、自分の魂の本性について無知であるという想念に悩まされることがあるかとたずねた。彼女はわたしの質問を理解することさえできなかった。彼女は人生で一度も、一瞬も、あのバラモン僧を苦しめた問題について考えたことがなかったのである。彼女は心からヴィシュヌの変身を信じているし、ガンジス川の水をちょっと浴びることができれば、自分は最高に幸福な女だと考えていた。

この卑しい生き物の幸福に感銘を受けながら、私は哀れな哲学者のもとへ戻った。「あなたは隣で何にも考えない無学の人が満足して生きているときに不幸でいて恥ずかしくないですか?」

「そのとおりじゃ」彼は答えた。「私は何百回も、お隣さんのように脳なしだったら幸せになれると自分に言い聞かせたよ。しかし、私はそんな幸福は欲しくはないんじゃ。」

- バラモン僧の答えは今まで以上にわたしに感銘を与えた。私は自分自身のことを考えてみて、確かに、私は愚鈍になってまで幸せになりたいとは思わないと思った。

ベンサム

- 快楽をもたらすものはどれも価値がある。
- 快の量が同じなら同じ価値。
  - 強度、持続性、純粋性etc

快楽計算

- 幸福（我々が求め、また求めるべきもの）＝快楽、苦痛の欠如
- 基本的には「量」がすべて。
- 強さ、持続性、確実性、遠近性
- 多産性、純粋性、範囲。

快苦のリスト

- 感覚（の快）、富、熟練、親睦、名声、権力、経験、慈愛、悪意、記憶、想像、期待、連想、解放
- 欠乏（の苦痛）、感覚、不器用、敵意、悪名、経験、慈愛、悪意、記憶、想像、期待、連想

- 感覚の快 ＝ 嗜好または味覚、酩酊、嗅覚、触覚、聴覚、視覚、性的感覚、健康、活力、精力の躍動、新奇さ、etc.

- Etc.

- すべての技芸（Art、芸術）と学術(Science、科学)——娯楽と好奇心のための技芸と学術の両方について語っているのだが——が持つ価値は、それが生み出す快に正確に比例している。ある人々が芸術や学問に認めようと試みているその他の卓越性は、実はまったくたわごとにすぎない。偏見を離れてしまえば、押しピン遊びは音楽や文学といった技芸や学術と同じ価値がある。もしも押しピン遊びが、より多くの快を提供するとすれば、それはより多くの価値があることになろう。

詩や音楽はほんの少数の人々によってしか楽しまれない。押しピン遊びは常に無害である。同じことが文学についても常に主張できれば好都合だが、実際にはそうではない。

実際のところ、文学と真理との間には、本性上の対立がある。それは文学の誤った教訓とフィクション性である。文学者は常になにか偽であるものを必要としている。文学者が真理に土台を置くというふりをするときにも、その上にある装飾品はフィクションである。文学者の仕事はわれわれの感情を刺激し、偏見を助長することにある。真実、すなわちあらゆる種類の正確さは、文学者にとっては致命的である。文学者はなにごとも色眼鏡を通して見ねばならず、他の人々にも同じよう色眼鏡を通して見させようとするのである。

たしかに、これまで高貴な魂（noble souls）と呼ぶことのできる人々が存在しており、文学と哲学はともに、彼らに多くを負ってきた。しかし、これらの例外は、この文学という魔術が生み出した不幸を償うものではない。もし文学と音楽が押しピン遊びよりも好まれるに値するとすれば、それは、まったく気むずかしい人々を満足させるよう計算されているからに違いない。

- 快楽に善悪はない。量がすべて
- 「もっとも恥ずべき犯罪者」の感じる快も、快は快。被害者の苦痛の方が大きいので犯罪は不正であるにすぎない
- 芸術や学問などの「高級」活動を特段重視する必要はない

カント

- インマニュエル・カント (1724-1804)
- 幸福は人間の目的ではない。

- 本当に「善」であるものは、「善なる意志」、道徳的によいことをしようという意志の他にはない
- 「この世界の内にもまたおよそその外でも、無制限に善とみなされうるものは、善意志の他をおいてはない」

- ……権力や富や名誉さらには健康、また無事達者で自分の境遇に満足していることすなわち幸福と呼ばれるもの、これらは、もし善なる意志がそこに加わって、それら幸運の賜物が心に及ぼす影響を正し、したがってその人の行為の原理全体を正して社会的に有益なものにするのでなければ、人を得意にならせ、したがってまたしばしば高慢にならせる。

- 幸福だと自己中心的な悪い人になる（？）

「また言うまでもないことであるが、理性的で公平な観察者は、一人の人間がずっと幸福に暮す有様を見る場合でも、その人が純粋かつ善なる意思のもつ美点を少しもそなえておらぬならば、決して愉快を感じることができないであろう。したがって、善なる意志は、人間が幸福であるに値するためにも、不可欠な条件をなしているとみえるのである。」

- よい人じゃないと幸福になる資格がない！
- 正しくない人は幸福に「値しない」

ところで理性と意志を持つ存在者においてそれの生存と快適な生とが、つまり幸福が、自然本来の目指した目的であるのならば、自然は、この目的の遂行者としてその生物の理性を選ぶことにより、このみずからの目的の実現手段に関して大きな誤りを犯していることになるだろう。なぜなら、その生物が幸福をめざしてなすべきあらゆる行為と、ふるまいの全規則とは、理性によってよりも本能によって、はるかにそ正確にその生物に指示され、幸福というその目的もはるかに確実に達成されうるであろうからである。

- 動物の方が幸せだ
- 理性は幸せの邪魔

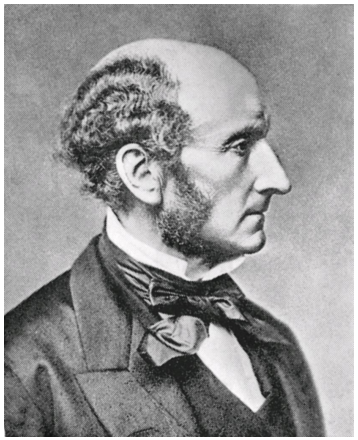
開発された理性が、生活と幸福との享受をめざしてはたらけばはたらくほど、ますます人間は真の満足から遠ざかる、ということは実際よくあることである。そのため多くの人々において、特に理性の使用に関してもっとも経験を積んだ人々において、かれらが時たま率直に告白することだが、ある程度の理性不信、すなわち理性に対する敵意が生まれる。

- 勉強し知性と教養が高まるとかえって不幸になる

なぜなら彼らは、通常の贅沢品をつくる技術の発明から得る利益のみならず、さらにもろもろの学問（これもかれらには結局知性の贅沢品だと思われる）から得る利益をも、すべて勘定した後、やはり事実上幸福を増すよりもいっそう多くの苦労を背負いこんだだけであることを見出し、その結果最後には、単なる本能に導かれるほうが多くてみずらからの行動に理性の力の多く及ぶことを許さないところの、かれらよりも平凡なタイプの人々を、軽蔑するよりもむしろうらやむのだからである。

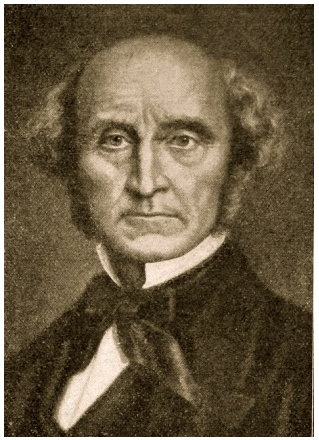
J. S. ミル

- 動物的な快楽では人間の幸福の概念を満足させない。
- 快楽の質の差。二つの快楽を十分に知った人が選ぶ方が質の高い快楽。
- ひとは高級な能力を発揮できる活動を選択する。



J. S. ミル

- 高級な快と低級な快。
- 能力の発揮。尊厳の感覚。
- 興奮と平静の交替。
- 教養の必要。
- 利他心の必要。



- (エピクロス派の哲学は、「豚向きの哲学」philosophy for swines と馬鹿にされていた)

「エピクロス派的生活と畜生の生活の比較がいかにも品のないこととと感じられるのは、**畜生の快楽では、どうにも人間の幸福の概念を満足させない**からである。人間は動物的欲情をこえる**高い能力**をもつ。そして、いちどその能力を自覚すれば、それらを満足させないようなものを幸福とは考えなくなる。」

ある種類の快楽はほかの快楽よりもいっそう望ましく、いっそう価値があるという事実を認めても、功利の原理とは少しも衝突しないのである。ほかのものを評価するときには、量のほかに質も考慮されるのに、快楽の評価にかぎって量だけでやれというのは不合理ではないか。

それでは快楽の質の差とは何を意味するか。量が多いということでなく、快楽そのものとしてほかの快楽より価値が大きいとされるのは何によるのか。こうたずねられたら、こたえは一つしかない。二つの快楽のうち、両方を経験した人が、道徳的義務感を離れて、皆、またはほぼ皆が断固として選ぶものの方が、より望ましい快楽である。両方をよく知っている人々が二つの快楽の一方をはるかに高く評価して、他方より大きい不満がともなうことを承知のうえで選び、他方の快楽を味わえるかぎりたっぷり与えられてももとの快楽を捨てようとしなければ、選ばれた快楽の享受が質的にすぐれていて量を圧倒しているため、比較するとき量をほとんど問題にしなくてよいと考えてさしつかえない。

ところで、両方を等しく知り、等しく感じ享受できる人々が、自分のもっている高級な能力を使うような生活態度を断固として選びとることは疑いのない事実である。畜生の快楽をたっぷり与える約束がされたからとって、何らかの下等動物に変わることに同意する人はまずなかろう。馬鹿や愚鈍や悪漢のほうが自分たち以上に自己の運命に満足していることを知ったところで、頭のよい人が馬鹿になろうとは考えないだろうし、教育ある人間が無教養な人間に、親切で良心的な人が下劣な守銭奴になろうとは思わないだろう。こういう人たちは、馬鹿者たちと共通してもっている欲望を全部、もっとも完全に満足させられても、馬鹿者たちより余分にもっているものを放棄しないだろう。

この人たちが放棄を考えるようなことがあるとすれば、それは、極度の不幸に陥って、たとえ彼らから見てどんなに望ましくなくても、自分の運命を他人の運命ととりかえるほかにその不幸を免れる途がないときにかぎられよう。

高級な能力をもった人が幸福になるには、劣等者より多くのものがいるし、おそらく苦悩により敏感であり、また必ずやより多くの点で苦悩を受けやすいにちがいない。しかし、こういった数数の負担にもかかわらず、こんな人が心底から、より下劣と感じる存在に身を落とそうなどとはけっして考えるものではない。

この、下劣な存在に身を落としたくないというためらいについては、なんとでも説明できよう。たとえばそれを誇りに帰すこともできる。……また、これを、自由と個人の自主性への熱望のせいにしてもよい。……だが、それにいちばんふさわしい呼び名は、尊厳の感覚である。人間はだれでも、なんらかの形で尊厳の感覚をもっており、高級な能力と厳密にではないが、ある程度比例している。この感覚が強い者にとっては、これと衝突するものは、瞬時をのぞけば、いっさい欲求の対象たりえないほど、彼の幸福の本質的部分をなしている。

感受能力の低い者は、それを十分満足させる機会にもっとも恵まれているが、豊かな天分をもつ者は、いつも、自分の求めうる幸福が、この世では不完全なものでしかないと感じるであろうことはいうまでもない。しかしこういう人も、不完全さが忍べるものであるかぎり、忍ぶことを習得できる。そして、不完全だからといって、不完全さをまるで意識しない人間をうらやんだりしないだろう。不完全さを意識しないのは、このような不完全さをもつ（高級な）善を感じる能力が全然ないということだからである。

満足した豚であるより、不満足な人間であるほうがよく、満足した馬鹿であるより不満足なソクラテスであるほうがよい。そして。もしその馬鹿なり豚なりがこれとちがった意見をもっているとしても、それは彼らがこの問題について自分たちの側しか知らないからにすぎない。この比較の相手方は、両方の側を知っている。

- 興奮と落ち着きの交代とバランスが重要。

満足した生活のおもな内容は二つあり、そのどちらか一方だけで、しばしば目的を達成するに十分である。その二つとは、平静と興奮である。平静さが豊かに恵まれておれば、ほんのわずかの快楽で満足できよう。興奮が多ければ、かなりの量の苦痛でも我慢できる。大衆が両方を兼備することなど金輪際不可能だとは言いきれない。

この二つは両立しないどころか自然に結びつくものであり、一方が長びけば他方が準備され、他方を熱望させるはずのものだからである。ただ、怠け心が高じて悪徳となっている人だけが、休息の後にも興奮を求めない。また、病的に興奮を求める人だけが、興奮後の平静を、先だった興奮に比例して愉快には感ぜず、退屈で気の抜けたものと感じるのだ。

- 利己的で自分のことしか考えないと興奮が少ない。

かなり幸福な境遇にある人が、人生に価値を認めるにたる程の享楽を見いださないのは、およそ、自分のことしか考えないからである。公私にわたって愛情を欠く人には人生の興奮は非常に削減されたものとなり、いずれにせよ、いっさいの利己心が終息するする死期に近づくにつれて、その価値は減ってゆくほかない。これに反して、自分の死後に個人的愛情の対象を残す人、とりわけ人類の全体的利益によって同胞感情を開発した人は、死の前夜でも、若さと健康に恵まれて元気旺盛であったときと変わらず、人生に溌剌たる興味を持ち続けるのである。

- 教養があれば幸福になりやすい。

利己心に次いで人生に不満を抱かせるおもな原因は、精神の開発[教養]不足である。開発された[教養ある]精神——といっても、哲学者の精神をいうのではなく、知識の泉が開かれており、かなりの程度その能力を鍛えるように教わっている精神——は、周囲のあらゆるものに、尽きることのない興味の源泉を見出す。たとえば自然の事物、芸術品、詩的構想、歴史上のできごと、過去から現在にわたる人類の足跡、さらにはその将来の展望などに。

純粋な私的な愛情と、公共善への誠実な関心を持つことは、程度の差はあっても、正しく育った人ならだれにでもできることである。こんなにたくさん興味をひくものがあり、こんなにたくさん享受すべきものがあり、さらにまたこんなにたくさん是正し、改善すべきものがあるこの世界では、この程度のふつうにみられる道徳的・知的資源を備えた人なら、誰もが羨むにたる生活を送ることができる。そしてこの種の人は、悪法のためや、他人の意志に屈従されられたため、あるいは手近な幸福の源泉を利用する自由を奪われているのでないかぎり、人生の明々白々な害悪——貧窮、病気とか、愛するものの冷淡・無能・若死といった肉体的ならびに精神的苦悩の大根源——を避ければ、この羨むにたる生活を見つけ損ねることはない。

ミルの『自由論』

- 幸福になるには個性の自由な発展が必要。
- 自分の幸福に一番関心があるのは自分自身。
- 自分にとってなにが幸福であるのかを一番よく知っているのも自分自身。
- 選択しないと選択する能力は伸びない。
- → 各自自由に自分にあってると思うライフスタイルを採用するべきだ。